

第6回 ESD・社会科理論研究会

- ◇開催日時 平成29年3月7日(火) 19時30分～22時30分
- ◇会場 中澤研究室
- ◇参加者 河野(富雄第三小)、新宮(平城小)、中澤哲(平群北小)、島(郡山西小)
中澤(奈良教育大学)
- ◇内容 第6章「仕事の心理」、第7章「注意の発達」 担当:中澤哲先生

第6章「仕事の心理」

- ・授業において仕事を取り入れる意味は、その仕事に関わる様々なスキルの熟達を目的とするのではなく、感覚訓練と思考訓練の方法として行う。仕事をすると、今やることに最大限の意識を傾けることになり、それが感覚訓練・思考訓練になっている。
- ・仕事は、世界に対する人間の基本的諸関係の周りに集まるものとして類別される。
 - 「自然」に対するもの: 第一次産業
 - 「ものづくり」に対するもの: 第二次産業
 - 「人間」に対するもの: 第三次産業
- ・感覚訓練をするには、なぜそれをするのかという、必然的動機が子どもの側に生じるように状況設定をする必要がある。
- ・思考訓練においても、必然性・切実性が子どもの側に生じていることが成立条件である。思考は、何らかの困難に処する必要があるときに生じるものであるため、子どもが「問題」意識を持つことが重要である。

かつて、長岡文雄と有田和正の間で「切実である派」と「切実になる派」の論争があった。

「切実である派」(長岡): 子どもの日記などから、学ぶ意味のある興味を抽出し、問題づくりを行う。

「切実になる派」(有田): 教員が意図的にネタを提示し、意味のある興味を構成する。
- ・よい興味とは、系統性・継続性のある興味であり、仕事にはそれを満たす条件がある。



第7章「注意の発達」

○注意の発達段階

- ①無意的注意 単純な没頭
 - ②有意的注意 目的意識のある注意(目的に至る方法についての取組の見直しには至らない)
 - ③反省的注意 メタ認知 問題の解決方法を見直し、より効率的な方法を選択しようとする
問題解決的な学び方を習得することになる注意
- ・自然界の事物・過程・および諸関係の学習も、人間的な仕組みのうちに置くのがよい。

例えば、「川に関する環境問題」を取り扱うとき、川に水を採取してCODなどを測り、川の汚染状況を調べ、学習する学校が多い。しかし、川を人間的な仕組みのうちに置くというのは、水田で米作りをされているAさんについて聞き取り調査を行い、Aさんが様々な工夫や苦勞をして米作りを行っているが、「水がよくないので、昔のようにおいしい米が育たない」といった言葉に着目する。「おいしい米を作りたい」というAさんの願いを実現するために、川の水質調査や汚染原因を突き止める、汚

染対策を検討するといった授業展開が考えられる。

- ・人間と自然を「媒介」するものが、「教材」である（そういう教材を開発する。単なる教科書を指しているのではない）。教材の親近性および連続性から、多様な教科や活動を「相関」させる。それが教科横断的な学習であり、総合的な学習である。特に教材に含まれる「人の活動」に着目して、総合的に取り扱うことで、豊かな学びが実現する。
- ・デューイはこの章で、「課題発見能力」の重要性を繰り返し述べている。「問題」こそ、学習の中心である。

○学びがいのある「問題」をもたせるために

- ・日頃から教科を問わず「なぜ疑問」「どうして疑問」づくりに取り組む。
- ・インパクトのある導入や、体験的な活動を通して、疑問づくりを行い、それを黒板の上で、①すぐに解決できる疑問と長続きする疑問、②共通点のある疑問、③多くの子どもが感じている疑問、④方向性の異なる疑問、などに分類し、学習の中心となる「問題」を子どもと教師が共通理解しながらつくっていく。
- ・学びがいのある疑問であるかどうか、見たところ方向性が違うが、いずれ中心になっていく疑問などを見極めるために、教員の深い教材研究が欠かせない。

次回は3月30日（木）17時から中澤研究室で

第8章の担当は新宮先生　ここで「学校と社会」の読解は終了

次は、『学びとは何か』今井むつみ、岩波書店、2016年をテキストにして学びます。

やり方が変わります。

第1章を各自が読んで、大事だと思ったところの「抜き書き」を作成してきます。それを交流することで、中心を把握する力を高めると同時に、子どもの学び方（これまでは教え方が中心であったが）についての理解を深め、日々の授業改善を目指します。

